

報告事項ウ

青谷上寺地遺跡の発掘調査成果について

青谷上寺地遺跡第17次発掘調査の成果について、別紙のとおり報告します。

平成29年12月27日

鳥取県教育委員会教育長 山本 仁志

# 青谷上寺地遺跡の発掘調査成果について

平成29年12月27日  
文化財課

平成28・29年度に行った青谷上寺地遺跡第17次発掘調査の成果は次のとおりです。

## 1 主な調査目的

遺跡の最盛期である弥生時代後期後半～終末期（2・3世紀）における集落の中心域での生産活動、地域間交流や交易活動の実態解明。

## 2 主な調査成果

集落の中心域西側（図1）を発掘調査したところ、土器片などが廃棄された土坑類を多数発見した。さらに、銅製品やガラスまたは石製の玉類など、当時の貴重品が豊富に出土した。（図2）

これらのことから、集落の最盛期には広範な地域との間に交流があり、重要な交易品となる玉類の生産を行っていたことがわかった。

### （1）銅製品

**銅鏃・・・銅製の鏃（やじり）。弥生時代の武器（図3）**

22点出土。過去の調査で出土した点数との合計は62点。

- ・1遺跡における銅鏃出土点数は全国トップクラス。集中的に銅鏃が出土する遺跡はまれで、山陰地方では青谷上寺地遺跡だけ。
- ・九州地方北部や近畿地方で出土したものに見られる特徴的な形をした銅鏃があり、集落の最盛期に日本列島の各地で製作された製品が運ばれてきたものと考えられる。
- ・過去の調査で銅鏃が射込まれた殺傷人骨が見つかっており、当時の社会情勢を考える上で重要。

**貨泉・・・中国の新しい時代（AD8～23年）の貨幣（図4）**

1点出土。過去の調査で出土した点数との合計は5点。

- ・全国で約90点しか出土例がない希少品。貨泉が出土する山陰地方唯一の弥生時代遺跡。
- ・青谷上寺地遺跡が日本海交易の拠点だったことを示す。

### その他

銅戈（どうか）の破片1点が出土（詳細は別添資料参照）。

### （2）玉類

**ガラス製玉類・・・大陸で生産されたガラスを再加工した玉類。有力者の装身具（図5）**

小玉：約140点、管玉：5点、勾玉：4点などが出土。

**ガラス片・溶着したガラス粒（図6）**

再加工前の素材とみられるガラス片と、加工途中のものとみられるガラス粒の塊が出土。

- ・ガラスの素材を入手し、再加工して各種玉類を生産していたことを示す。
- ・ガラスの玉類の生産を確認できる遺跡は山陰地方唯一。

**石製玉類・・・碧玉などの希少な石材を用いた玉類**

碧玉・緑色凝灰岩製の管玉：約50点、管玉に孔をあけるための工具（石針）：12点  
水晶製の算盤玉（そろばんだま）：10点が出土。

- ・工具とともに、加工途中のものも出土。ガラス製玉類とともに、石製玉類も生産。



図1 第17次発掘調査地点

調査地点周辺が集落の中心域。他よりも土地が高い微高地で、たくさんの人が活動していた。



図2 3世紀頃の遺構の検出状況

3世紀頃の土器が廃棄された土坑などの遺構がたくさん見つかった。また銅鏃やガラス製の玉類が多数出土した。



図3 銅鏃

右側にならぶ茎（なかご）のないものが山陰地方に多くみられる銅鏃。茎のあるものは九州地方北部や近畿地方の銅鏃とよく似た特徴をもつ。



図4 貨泉

右に「貨」、左に「泉」の字が鑄出されている。沿岸部に点在する重要な遺跡から出土することが多い。



図5 ガラス製の小玉

首飾りなどに使用されるビーズである。当時の日本ではまだガラスを製造していないと考えられており、たいへん貴重な装身具である。



図6 溶着したガラス粒の塊（左）とガラス片（右）

ガラス粒は熱を受けて溶着したもので、熱して再加工中のものと考えられる。ガラス片は透かしてみると、うっすらと青い。

# 青谷上寺地遺跡第17次発掘調査出土の銅戈片について<sup>どうか</sup>

第17次発掘調査の出土品の中に銅戈片を確認した。戈は柄に直交または斜交するように身を着装し、振り回して打ち込んだり、切りつける武器であるが、日本列島出土銅戈の多くは実用品というよりも、武器形の祭器として用いられていた。

## (1) 出土層位と出土地点

層位 弥生時代終末期（3世紀前半）の土器が含まれる地層から出土（第1図）

地点 出土地点は調査区中央南側（第2図）

ガラス製玉類や石製玉類が密に分布する範囲の南西側から出土

## (2) 銅戈片の特徴と時期

銅戈の「胡」部の破片（第3図） \*銅戈の部分名称については第4図参照

残存する大きさ：長さ3.4cm 幅2.3cm

銅戈には胡が薄い近畿（大阪湾）型〔2～8mm〕と、厚い九州型〔10～20mm〕がある。第17次調査出土の銅戈片の胡は厚みが4mmと薄く、近畿（大阪湾）型銅戈に分類される。

近畿地方の事例と比較すると、全長28cm程度（中型）の銅戈の一部と考えられる。

国宝桜ヶ丘銅鐸・銅戈群（兵庫県神戸市）の銅戈7点に最も類似

近畿（大阪湾）型銅戈の新相段階の型式で、弥生時代中期後半（紀元前2・1世紀）に製造されたものと考えられる。

## 銅戈片出土の歴史的意義

### (1) 近畿地方より西の地域で初めて出土した近畿（大阪湾）型銅戈

近畿型銅戈は、古相の型式（刃の部分を平滑な面に仕上げる型式）のものが長野県で出土しているが、新相の型式（刃の部分を鋳型から取り外したままの状態、平滑な面に仕上げない型式）は大阪湾周辺の近畿圏でしか出土していなかった。この度、青谷上寺地遺跡第17次発掘調査で確認した銅戈片は、初めて近畿圏より西の地域で出土した近畿（大阪湾）型銅戈として注目される。今後、弥生時代の社会、地域間の関係、青銅器の流通における青谷上寺地遺跡の位置づけを考える上で重要な発見である。

### (2) 青谷上寺地遺跡で初めて確認された武器形青銅器（銅戈）

青谷上寺地遺跡には<sup>かのえ</sup>戈柄や<sup>かのきや</sup>戈鞘の木製品や、銅戈形木製品、銅劍形木製品、銅劍形<sup>げいこつ</sup>鯨骨製品といった銅製の武器を模した祭器の存在が確認されていたが、銅製の武器形祭器の存在は不明だった。第17次発掘調査で出土した銅戈片は、青谷上寺地遺跡に武器形の青銅器が存在した可能性を示すものであり、山陰地方における弥生時代の祭祀を考える上でも重要な発見である。

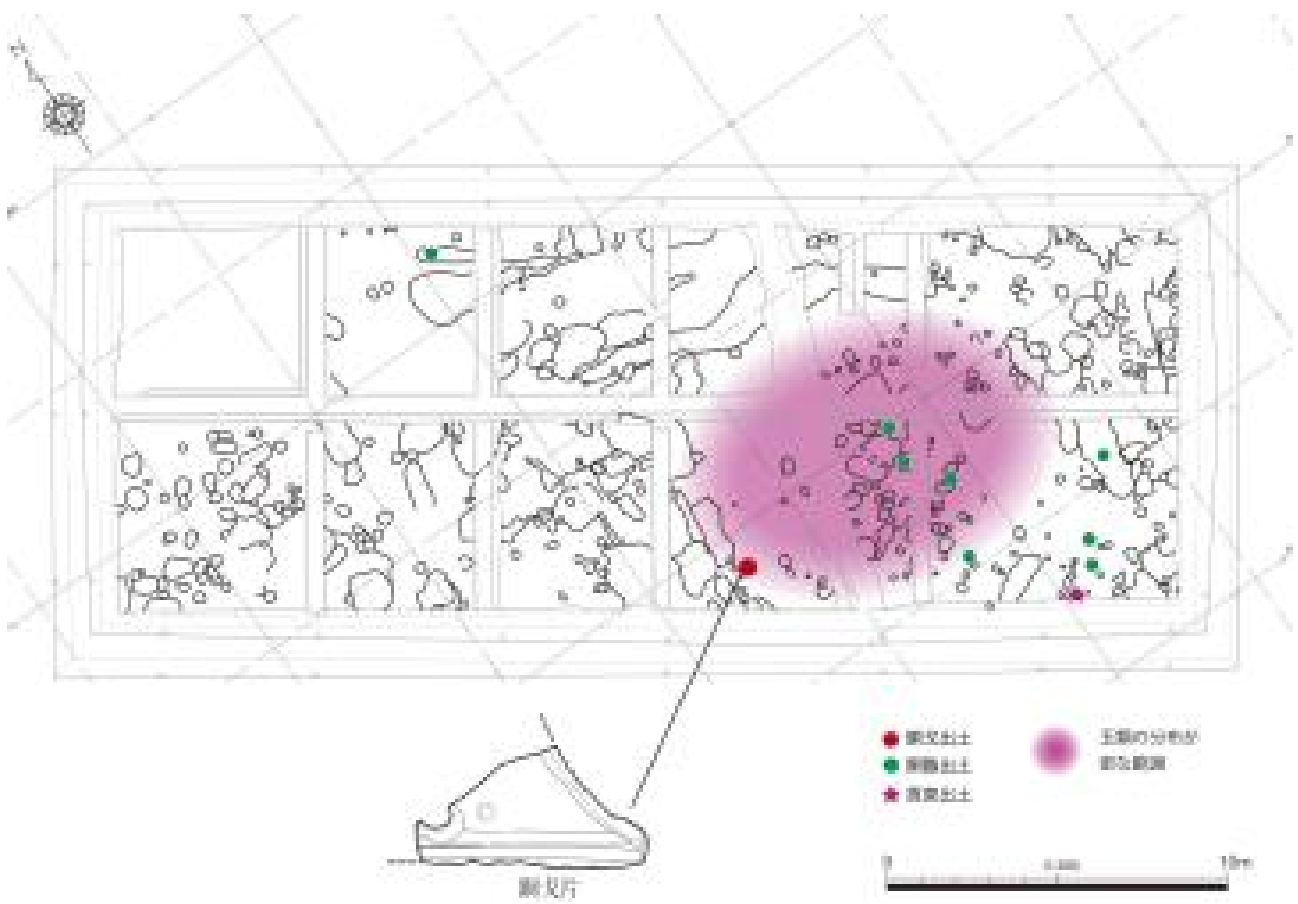
### (3) 青銅器の再利用（改鋳など）の素材の可能性

第17次発掘調査で出土した銅戈片は、本来、弥生時代中期後半に製作、使用された近畿（大阪湾）型銅戈の一部である。ところが、この銅戈片は弥生時代終末期の地層に埋まっており、また小さな破片の状態出土した。このことは、弥生時代中期後半に祭器だった銅戈が、その後、再利用（新たな青銅器への改鋳など）を目的とした素材として用いられていた可能性を示している。

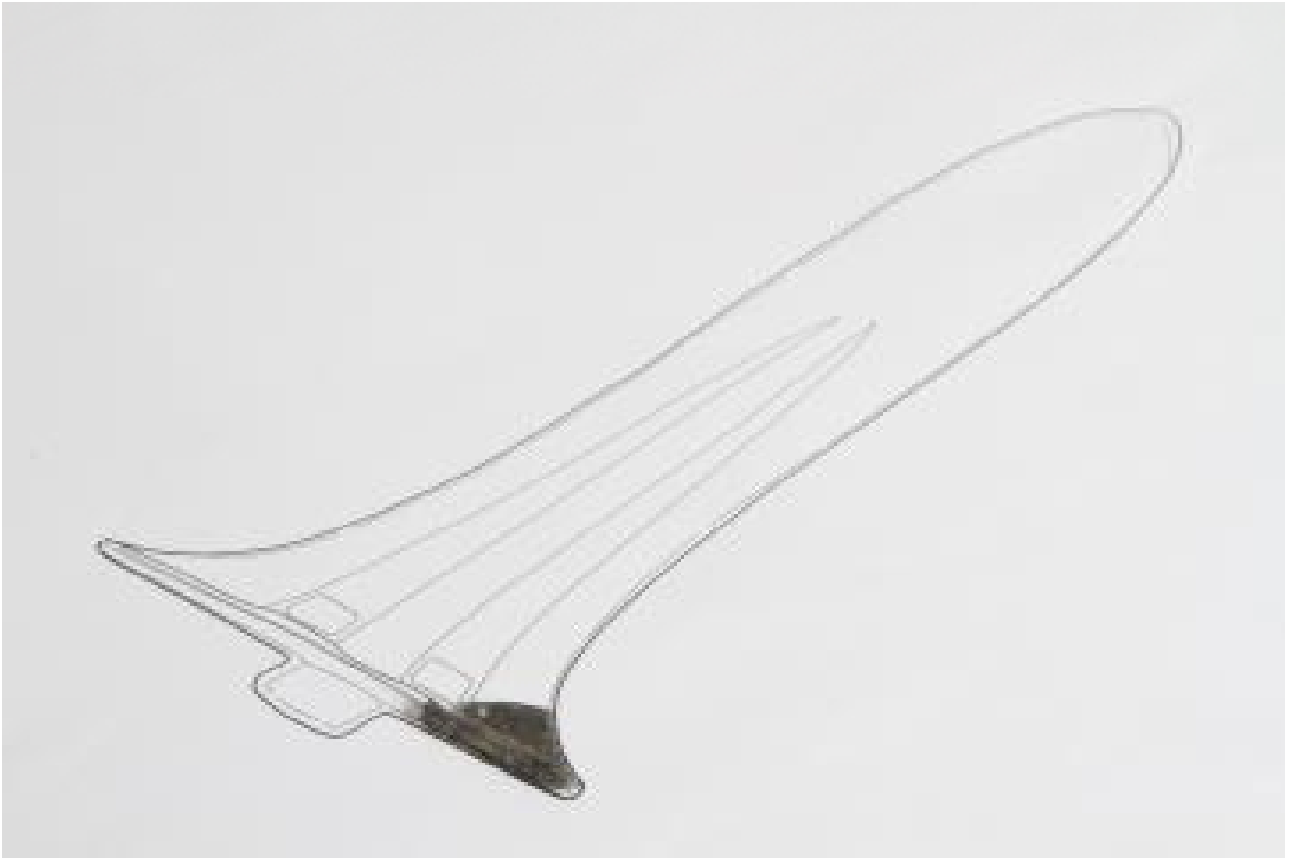
なお第17次発掘調査では同じ弥生時代終末期の地層を中心に22本もの銅<sup>どうぞく</sup>鑊が出土したことも注目される。多量の銅鑊と銅戈片との共伴関係は、弥生時代終末期における青銅利用、素材の消費実態を探る上で極めて重要である。



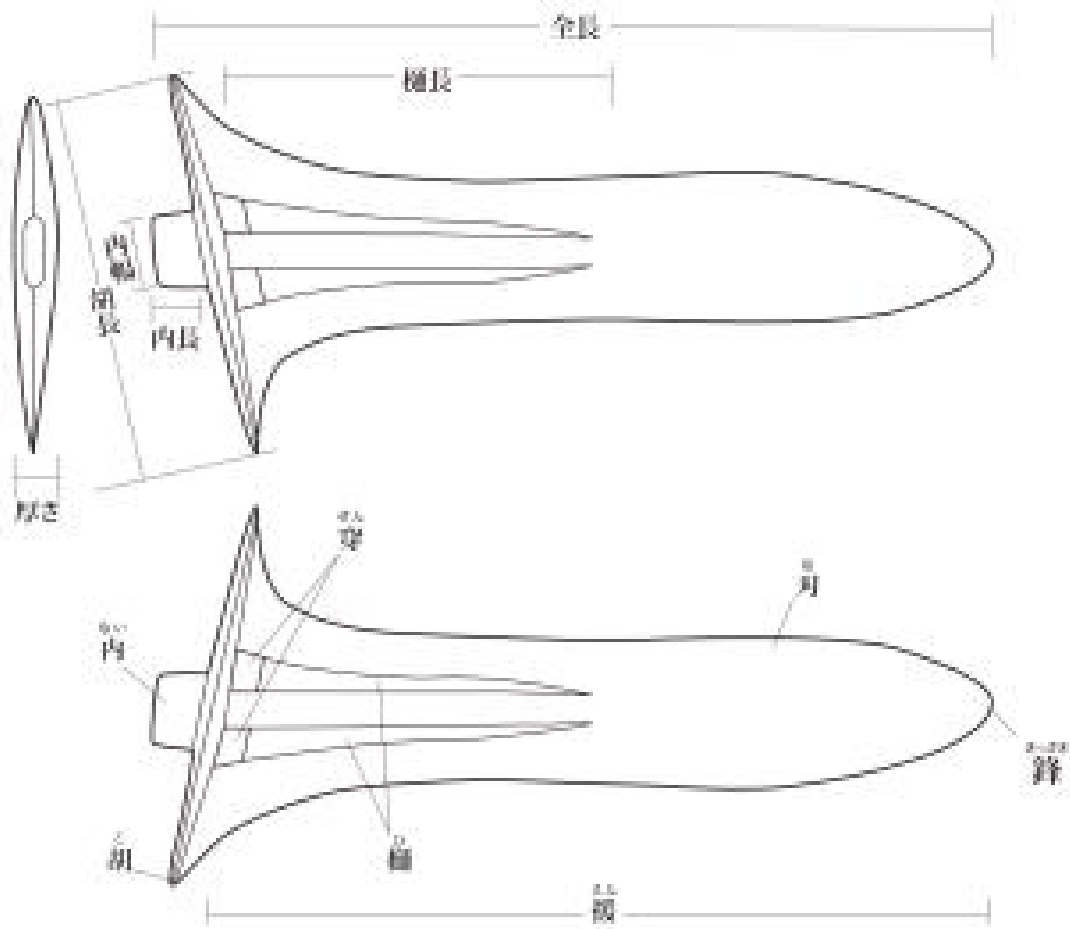
第1図 弥生時代終末期の地層から出土した銅戈片



第2図 銅戈片出土地点



第3図 銅戈片および近畿（大阪湾）型銅戈復元模式図



第4図 銅戈模式図（各部分の名称）